

2023（令和5）年度

2日〔**〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十五ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**黒色鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入すること。**
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消すこと。**
- 8 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

自己所有権の概念を現代的に解釈し、拡張して考えれば、個人の身体、性格、子どものころからの体験といった個人情報^(あ)は、その個人に帰属すると考えるのは自然である。つまり、個人の情報とは、本質的にその個人の「自己」を形成する一部なのであって、企業が自由^(ア)にシヨブンしていいようなものではない。これは「拡張された自己所有権」と呼びうるものである。

しかし、インターネット上のプラットフォーム^注企業は、その存在理由からして必然的に多くの個人から情報を手に入れてしまう。個人の好みや年齢、位置情報などに基づいて、その人が最も欲しいと思う商品を提案するようなプラットフォーム企業のサービスを利用するには、それらの情報を提供しなければならぬ。だが、情報について個人が企業と契約を結ぶのは難しく、たとえ結べたとしても、それは不完備なものとならざるを得ない。このため企業は、手に入れた情報を個人にとって不利になるようなかたちで事後的に用いてしまうかもしれない。《 a 》

A これは、プラットフォーム企業が悪であるとかいった問題ではない。それは、情報を価値の源泉とするような経済の必然的帰結というべきものである。もつと言えば、プラットフォーム企業は、企業活動を通じて、経済、そして社会に大きな発展をもたらす存在でもある。そのうえで誤解を恐れずに言えば、「情報の搾取」が起きていると言つてよいかもしれない。マルクスの労働搾取の概念に遡つて述べれば、自分自身できちんと情報を管理できているような状態で個人が得られる価値の総額を「本来受け取るべき価値」とし、実際にその個人が受け取っている価値との差分を考えればよい。このような差分を、その個人における情報の搾取分として理解できる。このような意味での情報の搾取が起きてしまうというのが、デジタル化が持つ大きな問題点の一つと言えよう。この問題の深刻さは、それが大きな搾取になり得るということだけでなく、人びとに気づかれにくいという点にもある。《 b 》

このことが人びとに気づかれにくいのは、おそらく、私的財の持つ「競争性」や「排除性」という性質を、財としての情報が満たしていないからである。競争性とは、ある個人がある物を消費すると、ほかの主体はそれを消費できないことを意味す

る。排除性とは、ある人が財を所有していれば、他の個人がその財を利用することから排除できることを意味する。パンを例にとつて考えてみよう。もしある人がパンを食べたとすると、X ことから、競争性と排除性を満たしていることがわかる。

それに対して情報の場合、こうした性質を満たさない。

「個人Aは30歳である」という情報について考えてみよう。この情報は、インターネットを通じて世界中の人びとと共有できる。このことは競争性が一切満たされていないことを意味する。排除性はどうか。人は誰しも、何かしら秘密を持っている。その秘密は自分が他人に言わない限り、誰にも知られないという意味で、排除性が満たされているように見える。しかし、二つの点に注意しなければならない。多くの秘密は自分だけのものではなく、すでに他人が知っていることが多い。秘密を守ると約束することはできるが、他人が話してしまうかもしれない。また、排除性は不可逆的なものとなってしまふ。一度、ほかの人が知ってしまうと、その情報を相手の記憶から消すことはできない。特に、現代のようにインターネットで一度情報が拡散^(イ)してしまうと、排除性を満たすことは困難である。例えば、過去にタイホ^(イ)歴があるという情報は、自分にとってはなるべく他者に知られたくないことだろう。しかし、友人がインターネットで検索して、別の友人とその情報を共有することを防ぐのは不可能に近い。《 c 》

これは情報が公共財的な性格を持つていることを意味する。さらに、ケネス・アローは、知識としての情報は「不可分性」と「不確実性」という性質を満たすことが多く、通常の公共財よりも一層複雑な影響を与えることを指摘した。すなわち、多くの場合、物質的な財のように分割して利用することが困難であり、将来、どのような事態が生じるかをあらかじめ明確にすることも通常は難しいため、何らかの情報を手に入れても、その意味や意義を完全に理解することはできないのである。例えば、「個人Aは30歳である」という情報は、固有名「A」と「30歳」が不可分に結びついており、「誰かは30歳である」というようなかたちで、部分的にこの情報を知ったとしても、Y いる。また、「個人Aは30歳である」という情報を手に入れたところで、その利用方法の全てを理解することはできないだろう。

こうした性質ゆえに、情報の搾取は労働の搾取に比べてよりインペイ⁽²⁾されやすいのである。自分自身の身体情報や嗜好⁽³⁾についての情報が企業の手に移っても、その影響は判断しにくい。自分自身がその情報を文字通りの意味で「失う」わけではない。依然として自分は、自らの身体や嗜好のことは知っている。しかし、プラットフォーム企業が私個人の情報を手に入れた場合、その企業はその情報を活用しようとするだろう。《 d 》

情報の搾取は見えにくいからこそ、このような搾取を防ぐための何らかの方策が必要なのである。2018年からEUでは、一般データ保護規則（GDPR）が適用されはじめた。これはEUにおける個人情報保護の保護を目的としており、その背後には個人データの所有権は人権の一つであるという考え方が強くある。こうした動きは、「個人のデータを個人のものに」という運動の一つとして捉えることができる。そこには、「忘れられる権利」や、「データのポータビリティ⁽⁴⁾（カハン性⁽⁵⁾）」も含まれている。GDPRは、EU圏内に住む全ての個人の情報に適用され、圏外の企業がEU圏内の人びとの情報を扱う際にも効力がある。そのため、FacebookやWhatsAppといった、EU圏でプラットフォームを提供する域外の企業と係争が起きている。《 e 》

ロック・マルクスの視点から、デジタル化社会における情報搾取の問題を考えてきた。そのうえでアレントの次の言葉を取り上げてみよう。

ロックは、私有財産を、存在するものの中で最も私的に所有されているものの上に築いた。

「最も私的に所有されているもの」とは、言うまでもなく個人の肉体である。個人に完全に帰属する自己としての肉体を動かすことになされる「労働」が、財産を生み出す唯一の手段であるところにロックの出発点がある。アレント⁽⁶⁾によれば、このロックの所有権の理論はミスやマルクスに引き継がれ、近代社会において支配的な考え方を形づくった。そうした認識を示したうえでアレントは、次のような批判を投げかけている。

ロック以下すべての後継者たちが、十分な英知をもっていたにもかかわらず、労働は財産、富、すべての価値の起源であり、結局は、人間の有する人間性そのものの起源であると考え、このように頑固に労働にしがみついていたのはなぜかという疑問が起ってくる。

ロック、スミス、マルクスといった思想家たちは、人間が他の人びとから孤立した「自己」を持っているという前提に立ち、その自己の中に人間の本質を見出すことができると考えていた。

われわれが本章での議論で取り組んだのは、ロックからマルクスへと引き継がれた近代社会の基盤をなす所有権の理論を拡張することで、21世紀におけるデジタル化社会の問題を理解することである。これはロック流の孤立した自己の考え方に、21世紀的文脈で「頑固にしがみつく」試みだと言い換えることができるだろう。

最後にロック⇨マルクス流の所有権アプローチでは捉えることが難しい問題を提起しておきたい。

改めて整理すれば、ロックの自己所有権では、肉体という最も私的に所有されているものを想定していたが、情報搾取の議論はそれを個人情報というレベルに拡張した自己所有権を基礎としている。個人情報は肉体とは異なり、私的に所有しやすいものではなく、むしろ、^E所有しにくいものだと言ってよいだろう。価値を生むほとんど唯一の直接的源泉が肉体であった、ロックやスミス、マルクスの時代は過ぎ去った。情報が価値の源泉となるなか、自己所有権の概念を拡張することで、搾取の理論を現代的に再構築するというのが、本章の試みであった。

このような試みは、人びとの生きる糧である所得や富を維持するために有用だと思われる。一方で、このような近代の理論への「しがみつき」の限界も表しているかもしれない。人間性や人間の尊厳は、財産や富といったものだけではないのである。孤立した自己を分析の参照点とするロック⇨マルクス流のアプローチでは捉えきれない、人間の存在価値があるとすれば、私たちは自己所有権に依拠することを部分的に放棄し、別の **I** アプローチを用いる必要がある。

まさにこの点が、デジタル化された経済において直面せざるを得ない **I** 問いだと思われる。それは、人間の価値

をどのように捉えるべきかという問題である。アレントが60年前に投げかけた問いが、デジタル化によっていま、IIしている。

(加藤晋、伊藤亜聖、石田賢示、飯田高『デジタル化時代の「人間の条件」』による。

出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

注 プラットフォーム企業——ここでは、多くの消費者が多くの企業と出会う「場」(プラットフォーム)をインターネット

上に提供する企業のこと。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- (ア) ショボン
- 1 ユイショある神社仏閣
 - 2 小切手にシヨメイする
 - 3 この問題にうまくタイシヨできない
 - 4 今年のザンシヨは厳しい
 - 5 江戸時代のシヨミンの生活

(イ) タイホ

- 1 栄養分をホキユウする
- 2 北洋で調査ホゲイを行う
- 3 各国がホチヨウを合わせる
- 4 ホニユウ瓶を煮沸消毒する
- 5 ホソウした路面を乾燥させる

(ウ) インペイ

- 1 思わぬフクヘイが現れる
- 2 大企業同士がガツペイする
- 3 オウヘイな態度を改める
- 4 組織のキュウヘイを打破する
- 5 カーテンで光をシャヘイする

(エ) カハン

- 1 荷物を目的地へハンソウする
- 2 この試薬で化学的なハンノウが起こる
- 3 国家のハントを拡大する
- 4 日々のハンサな業務で無駄に忙しい
- 5 売り出しのためのハンカを決定する

問二 傍線部(あ)「情報」について、これと同じ意味の「情」を含む熟語を、また傍線部(い)「拡散」について、本文中の意味としてこれに最も近いものを、それぞれ選択肢の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 情報

- 1 温情
- 2 情念
- 3 敵情
- 4 情操
- 5 感情

(い) 拡散

- 1 拡幅
- 2 散布
- 3 散逸
- 4 流言
- 5 流布

問三 空欄 X · Y に入る文として最も適当なものを後の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X 1 ほかの人は別の人からパンを分けてもらうことになる

2 ほかの人はそのパンを食べられない

3 ほかの人はそれをうらやましく思うかもしれない

4 ほかの人は購入できるパンの価格が高くなる

5 ほかの人はコメを強制的に選択させられる

Y 1 その情報の根幹は変わらずに

2 その情報の本質は失われて

3 その情報への権利は排除されたままで

4 その情報は記憶に留められて

5 その情報は搾取され続けて

問四 空欄 I · II に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。ただし二つある空欄 I にはどちらか同じ語が入る。

I 1 抽象的 2 受動的 3 体系的 4 直観的 5 倫理的

II 1 一極化 2 戯画化 3 顕在化 4 通俗化 5 明文化

問五 本文中の《 a 》《 b 》《 c 》《 d 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

この意味で、情報についての完全な排除は極めて困難なのである。

- 1 《 a 》 2 《 b 》 3 《 c 》 4 《 d 》 5 《 e 》

問六 傍線部 A プラットフォーム企業が悪であるとかいった問題ではないとあるが、筆者はどのようなことを問題にしているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 情報を価値の源泉とする経済の必然とはいえ、プラットフォーム企業が個人情報をおよぼす人々の不利益になるかたちで用いる可能性があること
- 2 プラットフォーム企業による「情報の搾取」は大規模だが、経済や社会に大きな発展をもたらす存在でもあることによつてそれが明るみに出にくいこと
- 3 自らの情報をもとにして、プラットフォーム企業から「本来受け取るべき価値」と実際に受け取っている価値との差分を正確に見積もるには専門性が必要なこと
- 4 「自己」の一部である個人情報から「本来受け取るべき価値」がプラットフォーム企業によつて大幅に削られているということをおよぼすことが認識しづらいこと
- 5 プラットフォーム企業は「情報の搾取」を行う存在なので、情報について個人がこれらと契約を結ぶことは困難、もしくは不完備なものとならざるを得ないこと

問七 傍線部D アレントとあるが、筆者はなぜこの人物の言葉や考えを引用したのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ここまでの議論で依拠した視点を一旦相対化し、デジタル化した現代の諸相を別の観点からより深く考察するため
- 2 本文の議論の根拠である自己所有権の概念が、近代社会において支配的な考えであり信用に足ることを示すため
- 3 デジタル化時代の人間の価値という問いは60年も前に投げかけられており、自分自身の発案ではないと断るため
- 4 自己所有権を個人情報に拡張する自身の考えは、労働や「自己」にしがみつくものではなかったと主張するため
- 5 デジタル化時代を詳しく分析するには、従来の所有権アプローチよりアレントの考えが優れていると断定するため

問八 傍線部E 所有しにくいとあるが、なぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 価値の源泉が肉体であった時代が過ぎ去り、自己所有権の概念に依拠していても個人情報を所有し続けられないから
- 2 プラットフォーム企業の規模や情報収集力に比して、人びとが個人情報を管理する力は微々たるものでしかないから
- 3 個人情報が自分の管理下にあっても、知らない間にその情報を誰かが所有したり利用したりすることがあり得るから
- 4 個人情報には、分割して利用することやその意味を完全に理解することが可能なものが多いという性質があるから
- 5 個人情報は本質的に公共財的な性格を持っており、社会・経済の発展のために用いるべきものと認識されているから

問九 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 プラットフォーム企業は、経済や社会に大きな発展をもたらしもするが、人びとに気づかれにくい情報の搾取という深刻な問題をもたらしもする。
- 2 「不可逆」とは「元に戻せない」ということなので、パンのような消費財は、誰かが消費してしまえば元通りにはできないという意味で本文で言う不可逆性を帯びていると言える
- 3 誰かの年齢や所属といった個人情報や他人が手に入れてもその意味を完全には理解できないが、いつの間にか何かに利用されている可能性はある
- 4 情報は、本来は本人が所有すべきものであり、搾取を防ぐためには、たとえばその所有権が人権のひとつであるという考え方に基づくような保護のための方策が必要である
- 5 本文では「自己所有権」「搾取」「労働」という従来からの考え方を使ってデジタル化した社会を考察しているが、筆者自身が認めているように、この方法は現代では全く力を持たない
- 6 現代はもはや労働することだけが価値を生み出す時代ではなく、価値というものを経済的な面からだけ捉えてはいけないう認識が筆者にはある

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

文学テクストは情報ではない。情報に還元されない過剰、残余、欠落、余白のみから成り立っているものが文学だとさえ言ってもよい。情報とは、その「意味内容」がアドレス先の個体の意識によって咀嚼され、伝達が完了したとたんに消滅しうる（消滅することが許される）言説断片のことである。伝達が滑らかに、迅速に、効率的に執行されればされるほど、それは良い情報だということとなろう。他方、伝達の過程で齟齬やチタイが生じ冗長性が介入するものが悪い情報なのである。情報の冗長性の積極的な価値を顕揚し、それがむしろ伝達の効率性に資するとする情報理論もないではないが、そこにおいても基準となるものが効率性の原理であることには依然として変わりはない。

それに対して、定家の短歌の「意味内容」、ボードレールの詩の「意味内容」、『戦争と平和』や『失われた時を求めて』や『八月の光』の物語の「意味内容」が読み手に伝達され、情報として消費し尽くされれば、それでテクスト自体は役割を終えて消滅してしまつてよい——などと云えるだろうか。言えはしまし。詩の場合であれ小説の場合であれ、文学的価値のを制するものは、テクストが湛えている不透明な過剰、無意味としか思われぬ残余、思いがけない欠落、読者の想像力を活性化させる余白、等々にほかならず、それはそのテクストの「情報」的価値とはいっさい無縁である。

文学テクストは、伝達されるものではなく、読まれるものなのだ。読むとはここで、そこに盛られた「意味内容」を理解するという単純な認知行為を超えて、テクストの過剰、残余、欠落、余白までをも受けとめて、テクストを読者の想像界で生産的に再創造し直す営みの謂いである。そうした営みへ向けてどれほど開かれているかという点に関わつて、文学的価値の優劣を語ることはもちろん可能だが、それは情報の質の優劣と同じに載せられうる問題ではない。情報の場合のように、効率的に伝達されるものが良い文学、効率性の低いものが悪い文学といった振り分けをすることが、まったくの妄念の

I でしかないことは自明だろう。

現代世界を特徴づけるもう一つのパラメーターである「グローバル化」もまた、文学とはきわめて相性が悪い。「経済活動

のグローバル化」と同期する議論として、「世界文学」という言葉が昨今しばしばメディアに登場する。「ワールド・ミュージック」がある以上、「世界文学」もあつて悪いわけはなからうというわけだ。しかし、音楽のように感覚器（ここでは聴覚）の末端を直接刺激し、興奮させ、美的印象を創り出すことによって成立する芸術ジャンルの場合とは異なり、ローカル言語で書かれる文学が言語間、民族間の境界を越えて「世界化」することはきわめて困難である。資本や金融や科学技術がいかに容易に国境を超えて軽やかに移動する時代になったとはいえ、文学もまたそれと同じような途を辿りうるかと考えることは楽観的にすぎるだろう。良き時代へのノスタルジーの香りをたたえたアガサ・クリステイの探偵小説や「情報」満載のフレデリック・フォーサイスの国際ポウリヤク小説は、たしかに世界中の空港のブック・スタンドで売られ、非英語国民の間でも広く読まれてはいる。《a》しかしそれは、有り体に言ってしまうばクリステイやフォーサイスが文学とは無縁で、そのテキストに過剰も残余も欠落も余白もないからだ（ただし、わたしはアガサ・クリステイのミステリーにおけるプロット構成の洗練は、ほとんど芸術の域に達していると考える者ではあるが）。

なるほど、翻訳という高度に文化的な営みはあり、そのおかげで文学テキストもまたある程度まで国境を越えることはたしかだろう。ベンヤミンの名高い『翻訳者の使命』を引きつつ、翻訳という二言語間の横断現象が独自に持ちうる積極的な意義について触れることもできるが、ここでは本格的な翻訳論を展開する紙幅はない。たとえば、現代日本の作家の文業の中でも、日本語という言語に固有の繊細な「機微」や複雑な「綾」に満ち満ちた古井由吉の小説などは、一見したところ、もっとも翻訳困難な、あるいはいっそ翻訳不可能なテキストの一つと見なされよう。《b》ところで、古井由吉の『杏子』『山籟賦』『白髪の唄』にはヴェロニク・ペランによる仏訳があり、これがまことに水際立つた技倆の駆使によって成った、何とも凄みのあるフランス語テキストとなっている。

古井の文章の「意味内容」がとことん正確と厳密を期して移し替えられているのは言うまでもないとして、ペラン氏の訳文には正確や厳密の規矩を超えたもの——古井由吉の日本語が孕んでいる繊細な「機微」の数々、複雑な「綾」の数々と等価なもの、フランス語によって実現されているのだ。驚嘆すべき力業と言うほかはない。それは原典の二次制作物として優れて

いるばかりではない。「Yōko」や“Chant du Mont fou”や“Les Cheveux blancs”という翻訳テキスト自体に、フランス語によつてしか現出しえないような超々意味論的な過剰、残余、欠落、余白がちりばめられているのである。《 c 》翻訳という営みの底知れない潜在的可能性に改めて目を開かれ、文学の「グローバル化」に希望を託したい気持ちに誘われるのは、こうしためざましいパフォーマンスの達成と出会う瞬間である。

とはいえ、そうした瞬間に立ち会うのは実はきわめて稀少な体験であり、文学をめぐるは多くの場合、^(あ)陳腐な言い草だが「Traduttore, traditore」(翻訳者は裏切り者)というあのイタリア語の諺を改めて思い出さざるをえない場面が多いことは残念ながら事実である。原典に対して裏切りを働きたくしなければ、そもそも翻訳などという労多くして功少なき営みには最初から手を出さぬに如くはないと考えるのも当然である。ペラン氏が古井の小説の翻訳にいったいどれほどの手間と労力をかけたかを想像すると、眩暈がするような思いに囚われざるをえない。実際、英語圏のジャパノロジストにはペラン氏ほどの野心がないのか、根気がないのか、あるいは能力の問題か、これに対応する成果を収めた古井文学の英訳は今のところ存在しないのである。

結局、もともと英語からの翻訳紛いのような、文意を一義的にたやすく確定できるシンプルな文体で書かれた小説ばかりが好んで訳され、それが日本文学の代表的作品として「グローバル」に流通してしまっているというのが現状なのだ。《 d 》「情報化社会」も「グローバル化」も効率性の原理に基づいて動いているという点を先に強調したが、文学テキストの世界市場への **II** においても結局は同じ原理が働き、「労」と「功」を秤にかけての兼ね合いから、訳し易いものばかりが訳され、「グローバル」な虚名を得て、訳しにくいもの——他言語への翻訳に抵抗する活力を秘めているということは、それだけですでに優れた文学作品の証しである——は世界市場に出される以前に篩にかけられて **III** され、ローカル言語の内部に取り残されることになる。日本の西欧思想・文学の受容はときに「輸入超過」などと揶揄されることもあるが、西欧の日本文学研究者の業績は、少なくとも近代以降の文学に関するかぎり、日本の外国文学者がマラルメやプルーストやピンチョンの翻訳と注解に当たって示したほどの学問的・芸術的水準には、今のところ届いていないと言わざるをえず、これはわが国

の大きな文化的活力の証しとしてわたしたちが大いに誇ってよいことでこそあれ、輸入ばかりにかまけていて情けないなどと恐縮すべきいわれはいささかもない。

「世界文学」の概念がもし可能であり何がしかのリアリティを持ちうるとしたら、そのために必要なのはまず、X市場——文学を文学たらしめる過剰、残余、欠落、余白に対して鋭敏に感応する瞳を持った読者たち（それはもちろん「グロ―バル」に存在する）に対して開かれた、もう、一つ、の市場を創出することだろう。それは何十万部、何百万部売れたものの、何々賞を受賞したのだといった話題とはまったく別の場所に存在する市場である。ジョイスの『ユリシーズ』は幾つもの出版社に断られた後、パリの英語文学専門の個人書店であるシェイクスピア・アンド・カンパニーから一九二二年に刊行されるが、それは限定千部の予約制の出版であった。この千部という数字に思いをいたすとき、文学のための市場が、量、速度、効率性が支配する資本主義の商品市場とは根本的に別の次元に存在する市場であることが改めて痛感される。部数の多寡などまったく問題ではなく、それよりもむしろ、『ユリシーズ』刊行を待ち望んで購入を予約した者の名簿の中に、イエイツ、ヘミングウェイ、ジッド、チャールスの名があったという事実の方こそはるかに重要であり、感動的とわたしなどの目には映る。

「情報化社会」と「グローバル化」の二概念がキー・コンセプトとなっている時代にあつて、その両者ともどもにラディカルに抗うヴェクトルを内在させた文学は、いったいどのような運命を辿るのか。時代にそぐわしい文学を、という要請が差し向けられていると考えるべきであろうか。《e》今この時代にあつて、この時代だからこそ、たやすく「情報化」され「グローバル化」されうるような「ポストモダン」文学——先に触れたような、翻訳の容易なニュートラルな文章で綴られた物語商品などがそれに当たる——を！ それはそれで一つの可能な、説得力ある情勢判断であり、立場バルディ、アリ選択であつて、それに従うかぎり、詩でも小説でも、それをかたちづくる言葉の姿はますます均質化へ、平準化へ向かうこととなる。それはしかし、文学の自己否定の途と言うべきではないだろうか。文学を文学たらしめるもつとも貴重な「質」を、「徳」を、「力」をみずから放棄する途ではないだろうか。わたしはそれにはとうてい与くみする気にはなれない。

そうではなく、逆に、「情報化」と「グローバル化」への徹底的な批判のためのもつとも強力な武器であり堡壘であるもの

こそが文学である——そうした捉えかたをするべきではないだろうか。これは平準化とは逆の、いわば特異化をめぐす方途と
いうことになる。「世界文学」は、ややもすれば平準化へ、均質化へ傾いていきかねない力学に抗い、さらにいつそう特異な
ものへ、容易には国境を越えがたいものへ生成変化してゆくべきだとわたしは考える。資本や技術や情報のように水平方向に
国境を越えようとするのではなく、とことん特異にして例外的なままで、垂直方向にみずからの立ち位置を下へ掘り下げ、普
遍性の基底に達しようと努めること、そこに達するまでの決して短くはないであろう時間をゆるやかに耐忍しつづけること。

もう十数年前のことになるが、パリで開かれた国際的な詩のモヨオ^ウし^カで、とあるチェコ詩人の朗読を聞いたときに味わった
異様な感動をわたしは忘れられない。わたしはチェコ語はひとこともわからない。朗読された作品の「意味内容」は、たしか
仏訳か英訳のハンドアウトが配布されたはずだから、ひと通りの理解は何となく届いていたはずだが、そんな「情報」はもう
とつくのとうに忘れてしまったし、あのときあの場においても大した役割は果たさなかったように思う。わたしを動かしたの
は自作の詩を読み上げてゆく詩人の、さあ、単に「声」とだけ言っておけばいいものかどうか。言葉を声に乗せ眼前の聴衆に
届けようとしている詩人の、注意力、集中力、確信、ためらい、熱意、昂揚感、手振り身振り、姿勢、笑み、息継ぎのための
間、^ま何かを言いそくなって言い直そうとするときにかすかな焦りの表情、ちよつとした気取りと芝居っ気、ちよつとした照れ
と羞恥心——ひとことでは言え、彼の肉体の現前^{プレゼンス}そのものだった。そのすべてを集約し表象しているものとしての、彼の
「声」だったと結局は言ってもよい。その「声」に乗った彼のチェコ語の詩の美しい音楽に、その意味は一語たりとも理解で
きないまま、わたしはうっとり聞き惚れてしまったのである。

その「声」を通じてわたしが触れたのは、大袈裟な物言いを恥じずに言えば、つまるところ彼の「魂」であった。そういう
ことになる。「魂」とは、先に触れた、作品を——その孤立した特異性を——垂直に掘り下げたところで突き当たる普遍性
の基底と呼んだものの別名にほかならない。それは普遍的であるがゆえに民族性の境界を越え、言語の境界を越え、国籍を異
にする人々の間で広く共有される体験である。徹底的に特異たらんとする意志が不意に徹底的な普遍性の空間へ突き抜けて
しまうということがあるのであり、そこに「魂」と「魂」の間の交流が実現する。それが文学の持つかけがえのない「質」で

あり「徳」であり「力」なのであり、それを通じて人は国籍も人種も階級もない「無^{アト}場^{ボス}」に連れ出される。

民族性の刻印を帯びた言葉によって書かれざるをえないがゆえに、国際的な **II** という点で文学にある限界が課されていくという事実は、先ほどから十分すぎるほど強調した通りだ。しかし、文学もまた越境する。文学が民族から民族へ、言語から言語へ、嘘のようなたやすさで境界を跨ぎ越え、「魂」と「魂」とを出会わせてくれる、そんな思いがけない出来事がこれまでたしかに生起してきたし、これからも生起しつづけるだろう。ただしそれは、いわゆる「情報化」や「グローバル化」による越境とはまったく違う回路によって実現される越境であるだろう。

(松浦寿輝「平準化と特異化」による。出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。)

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- (ア) チタイ
- 1 ヨウチな振る舞いを慎む
 - 2 列車が雪でチエンする
 - 3 計画をチミツに立てる
 - 4 方向オンチで道に迷う
 - 5 王が一国をトウチする

(イ) ボウリヤク

- 1 株価のボウラクを予想する
- 2 国のボウセキ業が発展する
- 3 見事な見識にダツボウする
- 4 ブンボウグを買いそろえる
- 5 国家のインボウ論を唱える

(ウ) モヨオシ

- 1 出欠の返事をサイソクする
- 2 監督としてサイハイを振る
- 3 一国のサイシヨウを務める
- 4 サイダンにお供え物をする
- 5 部下のサイリヨウに任せる

問一 波線部 i・ii は慣用的表現である。空欄に入る語として最も適当なものを後の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

i 文学的価値の を制する

- 1 延命
- 2 渴命
- 3 窮命
- 4 死命
- 5 身命

ii 同じ に載せられうる問題

- 1 雲上
- 2 架上
- 3 頭上
- 4 僭上
- 5 組上

問二 空欄 I III に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならず、二か所ある II には同じ語が入る。

- | | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 4 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 6 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| 7 | 7 | 7 | 7 | 7 |
| 8 | 8 | 8 | 8 | 8 |
| 9 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| 10 | 10 | 10 | 10 | 10 |

問四 傍線部(あ)・(い)の語句の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 陳腐な

- 1 滑稽な
- 2 無作法な
- 3 怪しげな
- 4 月並みな
- 5 風変わりな

(い) 揶揄される

- 1 大笑される
- 2 誤認される
- 3 からかわれる
- 4 過小評価される
- 5 非難される

問五 本文中の《 a 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

それが「情報化社会」とも「グローバル化」とも真つ向から背馳する限界的なテキストであることはあまりにも明らかだ。

- 1 《 a 》 2 《 b 》 3 《 c 》 4 《 d 》 5 《 e 》

問六 傍線部 A 「グローバル化」もまた、文学とはきわめて相性が悪いとあるが、「文学」のどのような点からこのように言えるのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 テキストにちりばめられた過剰、残余、欠落などは複数の民族間で共有される言語によってのみ伝達可能である点
- 2 文章中に書かれていない部分から余韻を感じ取ったり多様な解釈の統一を試みたりすることが必要になる点
- 3 感覚器官を直接経由するといった感じる行為だけでなく、百科事典的な知識が無ければ鑑賞できない点
- 4 ローカル言語ならではの表現が内包する潜在的な意味を想像力によって十分に味わうという行為を要求する点
- 5 テキストの表面には直接現れない「意味内容」が読者に余すことなく咀嚼されることを前提に存在している点

問七 傍線部 B きわめて稀少な体験 とあるが、筆者はこの表現を通してどのようなことを言いたいのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 小説の微妙なニュアンスや含蓄のある表現を文学的な価値を損なうことなく他言語に変換できている訳文はめったになく、むしろ現在では労を避けるがごとく平易な文体の作品ばかりを選んで翻訳しているということ
- 2 繊細な「機微」や複雑な「綾」を含み持つ小説の意味内容を一言一句ずつ対応させて正確かつ厳密に翻訳することに成功している作品は稀有なもので、通常はシンプルな言語で書かれた海外小説のほうが好んで訳されるということ
- 3 古井の文章に見られる言葉の不透明性を他言語で忠実に再現している書物に触れられるのはごくまれなことであり、現時点においてペランの仏訳に相当するレベルの古井の翻訳は発見されていないということ
- 4 日本語特有の含意の深さや広がり解釈可能な外国語に細かく移し替えている訳本は世界中でもごくわずかであり、たいいていの翻訳業は翻訳家の技術的な問題から原典を表層的なものに変えてしまう傾向にあるということ
- 5 文学テキストのうち情報に還元されない余剰となる要素をできるだけ多く言語化しようと努めた形跡が認められる訳本は珍しく、一般的に翻訳後の小説には原典の言語よりもニュートラルな表現が使われているということ

問八 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 効率性の原理に統べられた市場とは根本的に異質な
- 2 「グローバル化」に抵抗すべく徹底して閉ざされた
- 3 翻訳業の文化的達成度に本質を委ねている小規模な
- 4 速さを是とする市場意識を根本から変革してしまう
- 5 消費社会を形成する資本主義的な市場と融合しうる

問九 傍線部C 文学もまた越境する とあるが、ここでの「越境する」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 文学作品が、人間的な交流の場においてのみ突如として普遍性を帯び、その情報があらゆる国籍や人種の人々に水平的に理解されること
- 2 文学作品が、当初からの目標として普遍性の獲得を志向し、それを掘り下げていくことで、あらゆる国籍や人種、階級の人々に共有される存在になること
- 3 文学作品が、みずからの特異性をきわめた先で奇しくも普遍性を獲得し、民族や言語などの隔たりなしに広く受け入れられること
- 4 文学作品が、「情報化」や「グローバル化」に飼い慣らされていきながら、人々の肉体を通じて他民族に形容しがた
い感動を与えること
- 5 文学作品が、平準化、均質化とは正反対の方向へと発展を繰り返した結果として、万人に訴える思想的なメッセージ性を獲得すること

問十 次は、この文章を読んだ後に六人の生徒が意見を發表している場面である。本文の趣旨に合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 生徒A——筆者は文学が言語間、民族間の境界を越えて読者を得ることに本質的な困難が横たわっていることを指摘しています。その難しさとは、文学がローカルな言語で書かれることによるところが大きいのですね
- 2 生徒B——例えば、日本語の「桜の花」という言葉の意味の背景には、日本特有の文化的な含みがあると言えます。このような他言語で直訳しただけでは伝えられない要素が文学の翻訳を困難にしているのでしょう
- 3 生徒C——「情報」とは確実に伝達され、理解されることに意義がある言説断片と説明されていますが、この「断片化」に価値を見出みいだそうとする現代の傾向を、筆者は「平準化」と称して危惧しているのですね
- 4 生徒D——文学を文学たらしめる難解さや複雑さは、その作品が持つ最も貴重な要素でもあるのだから、文学が安易に「グローバル化」すれば、文学の特異性は失われ、無機質な作品ばかりになると予想されます
- 5 生徒E——筆者はチェコ詩人の朗読を聞き「異様な感動」を味わっていますが、この時筆者の身体の内では、聴覚を刺激して美的印象を生み出す一般的な音楽鑑賞と同じ原理が働いていたことが想像できます
- 6 生徒F——現代において、平準化・均質化に逆らって突き進んでいく文学が孤立していくことは想像に難くありません。しかし、そのような垂直的な生成変化こそが文学のもっとも大事な部分を守るのでしょう

国語解答用紙 2日 [**]

問一	(ア)	① ② ● ③ ④ ⑤
	(イ)	① ② ● ③ ④ ⑤
	(ウ)	① ② ③ ④ ● ⑤
	(エ)	① ● ② ③ ④ ⑤

問二	(あ)	① ② ● ③ ④ ⑤
	(い)	① ② ③ ④ ● ⑤
	問三	X
	Y	① ② ● ③ ④ ⑤

問四	I	① ② ③ ④ ● ⑤
	II	① ② ③ ● ④ ⑤

問五	問六	① ② ③ ● ④ ⑤
	問七	● ② ③ ④ ⑤

問八	問九	① ② ③ ● ④ ⑤
		① ● ② ③ ④ ● ⑤

問一	(ア)	① ② ● ③ ④ ⑤
	(イ)	① ② ③ ④ ● ⑤
	(ウ)	● ② ③ ④ ⑤

問二	i	① ② ③ ④ ● ⑤
	ii	① ② ③ ④ ● ⑤

問三	I	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ● ⑧ ⑨ ⑩
	II	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
	III	① ② ③ ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問四	(あ)	① ② ③ ④ ● ⑤
	(い)	① ② ③ ● ④ ⑤

問五	問六	① ● ② ③ ④ ⑤
		① ② ● ③ ④ ● ⑤

問七	問八	● ② ③ ④ ⑤
		● ② ③ ④ ⑤

問九	問十	① ② ③ ● ④ ⑤
		① ② ③ ● ④ ● ⑤

50点

50点